

# どんな人? 20号のクリエイターは



今回の表紙と特集は、これまでPF事業のデザインをたくさん手がけている人にお願いしたんよ。やっとあえたわあ。ほな、これまでのお仕事書いてみまひょか?



井上能之さん <http://bianca.cc>

1984年生まれ、京都市在住。2016年よりBianca inc.に参加。  
大阪を拠点とし、エディトリアルや広告デザインから、地域に  
関わるプロジェクトまで、幅広いフィールドでアートディレク  
ション・グラフィックデザイン全般の制作を担当。

**enoco**

大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]  
Enokojima Art, Culture and Creative Center, Osaka  
Prefecture

アートやデザインの創造力で、都市を元気にすることを目指す2012年4月にオープン。展示室や多目的室のレンタル事業、企画展やセミナー・ワークショップなどのほか、行政等の相談にも対応するなどクリエイティブな発想とネットワークで都市や社会が抱える様々な課題の解決に取り組んでいます。

〒550-0006 大阪市西区江之子島2丁目1番34号  
開館時間:10:00~21:00(ただし展示室は遅くによりオープン時間が異なります)  
月曜・年末年始(12月29日~1月3日)休館  
電話 06-6441-8050 | FAX 06-6441-8151 | メール [art@enokojima-art.jp](mailto:art@enokojima-art.jp)  
[www.enokojima-art.jp](http://www.enokojima-art.jp)

enocoニュースレター 20 2019年7月発行  
| 発行 | 大阪府立江之子島文化芸術創造センター  
| 編集 | 高坂玲子、吉原和音(enoco 企画部門)  
| 表紙・特集ページデザイン | 井上 能之(Bianca Inc.)  
| 表紙・特集ページイラスト | HARAIISO(原五十)  
| イラスト(エノケン、似顔絵) | タダユキヒロ  
| アートディレクション | 後藤哲也(000 Projects)  
| デザイン | 小池一馬(000 Projects)

「enocoニュースレター」は、enocoが年2回発行する情報誌。  
enocoで起こっていることや、enocoにかかわる人々が日々考えていることをお伝えしていきます。

—— 今回の特集テーマの「プラットフォーム」をまとめた番号がこれやんな?

井上 そうです。また、この中に登場するいくつか地域活性化やまちづくりに関わるプロジェクトで、デザイナーとしてプロジェクトに関わさせていただいている。タブロイド誌やフライヤーなどの広報媒体のデザインをはじめ、プロジェクトのキーアイテムとなるプロダクト、モビリティマネジメント啓発のための「ひらかた交通すごろく」(枚方市)や、多文化共生・多文化交流推進のための「やさしい日本語バッジ」(生野区)などの制作なども担当させていただきました。

—— めっちゃ見やすいって評判らしいな。enocoに相談にきたらもらえるんやろ。モノのデザインもしてんの?

井上 これは、大阪・堺市の竹野染工さんという染工場が手がける、ファクトリーブランド「hirai」のブランディングのお仕事です。ロール捺染による独自の両面染色技術をもとに、「重ねの色目」という日本古来の色彩文化に着想を得て生まれた手ぬぐいブランドです。2017年のブランド立ち上げ時から関わらせていただき、商品の企画・デザインからパッケージのデザインに至るまで、ブランディングとデザイン全般の制作を担当しています。

—— デザインってこんないろいろやんねんなあ。今度わしのこともかっこようしてや。



【アクセス】  
地下鉄(Osaka Metro)千日前線・中央線「阿波座駅」下車、8番出口から西へ約150m。徒歩約3分。

enocoの  
プラットフォーム  
これからのパブリックを  
まちに実装していくための実験場

江之子島文化芸術創造センターenocoがお送りする「enocoニュースレター」。表紙と巻頭は、毎号異なる関西のクリエイターたちが担当します。今回の特集ではenocoが手がけるプラットフォームについて、その考え方や活用事例をご紹介します。今回は記念すべき20号。これまで関わってきた地域や人々、そしてそれをモチーフにしたイラストが表紙を彩ってくださいました。

[www.enokojima-art.jp](http://www.enokojima-art.jp) 20号の表紙・特集 デザイン:井上能之(Bianca Inc.) イラスト:HARAIISO(原五十)

# Platform?



## “プラットフォーム”って？

enocoでは「プラットフォーム形成支援事業(以下、PF形成支援事業)」を実施しています(※2012～2018年度は大阪府の委託事業として実施)。

この「プラットフォーム」という言葉。鉄道の駅の乗降場を指す言葉として馴染みがありますが、「平らな形(のもの)」という語源があります。そこから「演壇、舞台」という意味で用いられたり、「基盤」「基礎を成すもの」という意味合いでも用いられ、政党の「綱領」やコンピュータの基幹部分を指すこともあります。

enocoでは、ある課題を解決するために多様なステークホルダー(直接的・間接的な影響を受ける利害関係者)が、対等な立場で交流・対話を行い、主体的に解決を取り組むための会議や合意形成の場のことを指します。この時、多くのステークホルダーが参画できる枠組みをつくるのが基本です(マルチステークホルダー方式)。平らな関係性の中で対話し、意思決定をし、みんなで行動を起こす場は、まさしく物事を進める時の「基盤」。それがenocoの「プラットフォーム」です。



自分の力でまちの課題に取り組み、未来をつくる人を。

では立場の異なる多くの人が集まって会議をすればうまくいくかというと、勿論そうではありません。ステークホルダーの関係性や立場を明確化し、平等に代表性を持つ主体を3者以上立てるのがキーになります(トライセクター方式)。自治体からの相談が多いenocoでは、行政・市民・専門家の3者でトライセクターを形成するが多く、専門家にはenocoがコーディネートするアート・デザイン、まちづくり(コミュニティデザイン)等の分野の人々が関わります。

最初はenocoがトライセクターの1極を担うこともありますし、トライセクターを引っ張る「トライセクターリーダー」の役割を担うこともあります。最終的な目標は、地域からトライセクターリーダーが出てくること。enocoではそういった自分の力でまちの課題に取り組み、未来をつくる人を見つけ、育て、互いに出会う機会をつくるため様々な種をまいっています。例えば相談窓口の設置や人材育成プログラムなど。ここでは実際にenocoの様々なリソースを活用し、地域でのプラットフォームづくりに動いている人を紹介します。



enocoをつかってプラットフォームへつなげる人々  
3つのモデルケースを紹介します。

case

1



西田章恵さん

(泉大津市生涯学習課)

## [enocoとのかかわり]

2014年度 enocoのそだん[enoso done!] 参加

2015年度 PF形成支援事業を活用し「多世代が楽しむ伝統文化祭」(ごかんのおまつり)を開催

「enocoの学校」受講(3期生)

## STORY

PF形成支援事業では、参加者が固定化する市の文化祭の課題を解決し、多世代が地域の文化を楽しみ、継承・交流する仕組みづくりに担当者として関わるながら、並行して「enocoの学校」を受講。他の自治体職員、クリエイター等、多様な背景・活動領域を持つ受講生との交流・協働を経験することに。翌年には、自立して文化祭を企画運営。美術教育を学ぶ大学生や地域の高校生にも関わってもらい、次世代の参加促進・協働をさらに進めた。



発表の場であった文化祭を、子どもたちが地域ならではの文化や扭い手と出会い、交流する場に生まれ変わらせた。

2017



2017年に大阪南西部に位置する市町からなる地域「泉州」という枠組みで、まちの境界をこえて文化芸術を通したまちづくりを考えいくための勉強会(シンポジウム)を検討、助成金を獲得する。

POINT  
enocoのネットワークをつかう

case

2



河田泰之さん

(泉南市埋蔵文化財センター)

## [enocoとのかかわり]

2013年度 PF形成支援事業を活用し「せんなんカンヴァス」を開催

「enocoの学校」受講(1期生)

## STORY

PF形成支援事業では、埋蔵文化財センターの活性化や文化財を活用した地域づくりを目指し、市民主体のお祭り「せんなんカンヴァス」を実施。enocoのプラットフォームの考え方・手法に刺激を受け、自らもノウハウを身に付けたいと並行して「enocoの学校」を受講。翌年度以降、市民・大学と協働し、自立して事業を推進し、センターは地域の文化の拠点に。府内ではenocoの普及活動を行い、別部局からenocoに相談が持ち込まれることが増えた。



地域の人々とともに「かまどベンチ」を制作し、そのお披露目と地域活動の発表の場としてのお祭りを市民主導で企画・運営した。

2018

POINT  
人ベースのネットワークで市町村の枠をこえる

## 「泉州アートサミット 2018」

enocoから「人」ベースでのネットワークを提案し、泉南市と岬町にも声をかけ、泉州アートサミット実行委員会が設立(阪南市生涯学習推進室も参加)。

平田オリザさん(劇作家)と豊岡市職員をゲストに迎えサミットを開催。各市町の職員と文化活動を行う市民、enocoが登壇し、泉州地域での文化芸術プラットフォームづくりのスタートを切った。2019年度も継続開催の予定。さらに、文化以外の分野におけるプラットフォームとのネットワーク化・連携を模索している。

泉州アートサミット2018  
フライヤー

case

3



新保太基さん

(岬町企画地方創生課)

## [enocoとのかかわり]

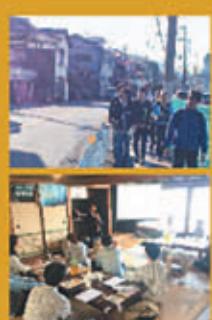
2016年度 enocoのそだん[enoso done!] 参加

2017年度 「enocoの学校」受講(5期生)

2018年度 PF形成支援事業を活用し「ローカル線の活性化、SNSを活用したタウンプロモーション」を実施

## STORY

空き家活用・移住支援・農漁業の活性化といった取り組みを進めるにあたり相談会に参加。翌年度には「enocoの学校」を受講し、受講生とともに岬町の課題を取り組んだ。そういった動きを積み重ね、PF形成支援事業化へと持ち込む。並行してenocoの学校卒業生が期を超えて岬町に関わりはじめ、その活動は事業終了後もゆるやかに継続中。丁寧に、半年ではなく中期的な視点を持ち、この町にしかできない/だからこそできることに取り組んでいる。



ローカル線の駅近くにある元旅館をリノベーションしたまちづくり交流館「ミサキヒトツク」を地域活動・情報発信の拠点として活性化させた。

思考と実践の学び場  
enocoの学校

既成概念にとらわれない自由で柔軟、かつ創造性豊かな発想や思考を学ぶ人材育成プログラム。2013年度から開講している。現在はプログラムを再編し、「enocoの学校／enocoの学校学科」として運営中。



## 課題の発見から一緒に考える

## enocoのそだん [enoso done!]

地域活性や社会課題に取り組む市民団体や行政職員の方々が抱える日々の悩みについて、enocoスタッフがアドバイザーとなって、その悩みを伺い、解決のヒントや課題に対するアドバイスをする事業。※月1回、相談窓口を開いていますが、それ以外でも随時相談を受付ています。



## enocoをつかい、enocoとともに動く人の輪をひろげる

enocoはPF形成支援事業のほか「enocoのそだん」「enocoの学校」などを実施しています。今回紹介した3名はそのリソースを活用し、地域で実践を重ねてきました。皆さん自治体職員ですが、大事なのは立場ではなく、公共(パブリック)について自分で考え、主体者として動くこと。そのためenocoでは「教育」「プラットフォーム」「ネットワーク」の3つの軸を連携させ、主体的に動く人材を育成し、ともに動いています。enocoは新しいパブリックを楽しくまちに実装していくための実験場であり、そういった人々のチャレンジの起点となる場なのです。

月	会期	時間	展覧会名	ルーム
7	16(火) - 21(日)	11-19(最終日11-15)	第14回 大阪独立作家展	[ルーム4]
	3(土) - 9(日)	11-18(月曜休)	大阪府20世紀美術コレクション「enocoおしゃべり美術館2019」	[ルーム4]
8	6(火) - 11(日)	10-20(最終日10-16)	梅蘭芳日本初公演100周年記念美術展	[ルーム1]
	20(火) - 25(日)	11-17(最終日11-16)	第48回 大阪二紀展	[ルーム1]
	29(木) - 9(日)	11-20(最終日11-16/月曜休)	天竺鼠川原克己Maenomori展	[ルーム1,2,3]
	17(火) - 22(日)	11-18(最終日11-16)	井上和雄 吉田修二 それぞれの個展	[ルーム1]
9	17(火) - 22(日)	10-19(最終日10-16)	翔夢グループ展(障がい者の仲間の広場)	[ルーム3]
	24(火) - 29(日)	11-20(最終日11-16)	そこにある気配 石山佳奈・押見凜 二人展	[ルーム2]
	24(火) - 29(日)	11-18(最終日11-16)	小林尉哉個展	[ルーム4(B)]
	1(火) - 6(日)	未定	新桜樹社 大阪支部展	[ルーム1,2]
	1(火) - 20(日)	未定(月曜休)	「Exploring」展	[ルーム4]
10	15(火) - 20(日)	10-19(土曜10-18/最終日10-16)	第90回 浪展 浪華写真俱楽部創立115周年	[ルーム1,2]
	22(火) - 27(日)	10-30-18(最終日10-30-16)	チャーチル会大阪展	[ルーム1]
	22(火) - 27(日)	未定	コクヨ水曜会展	[ルーム2]
	22(火) - 27(日)	未定	アーピカル☆絵画教室展	[ルーム4(A)]
	22(火) - 27(日)	11-19(最終日11-16)	久田奈津紀展	[ルーム4(B)]
	5(火) - 10(日)	未定	第77回 パンリアル展	[ルーム1]
	5(火) - 10(日)	未定	創友会展	[ルーム4]
11	12(火) - 17(日)	未定	第六回 西日本創作表装展	[ルーム1]
	12(火) - 17(日)	未定	ホスピタルアート イン ギャラリー2	[ルーム2,3]
	12(火) - 17(日)	10-18(最終日10-16)	大阪府土曜会・趣味の作品展	[ルーム4]
	19(火) - 24(日)	未定	第34回 新具象展	[ルーム4(A)]
	21(木) - 24(日)	公演時間はWeb参照	横東退屈道場#010「ジャンクション」	[ルーム1,2,3]
	26(火) - 12/1(日)	未定	シャドーボックス作品展	[ルーム1,2,3]
	26(火) - 12/1(日)	未定	ペントハウスの会展	[ルーム4]
12	3(火) - 8(日)	未定	第18回 国画会大阪作家展	[ルーム1,2]
	10(火) - 15(日)	未定	第六回 松の木会写真展	[ルーム1]
	17(火) - 22(日)	未定	2019年度第100回 白鷺会展	[ルーム1,2,3,4]

くわしくはWebサイトをご覧ください [www.enokojima-art.jp](http://www.enokojima-art.jp)

## PICK UP

## 大阪府20世紀美術コレクション「enocoおしゃべり美術館2019」

「enocoおしゃべり美術館」は、大阪府が所蔵する[大阪府20世紀美術コレクション]を対話による美術鑑賞をテーマとして紹介するコレクション展で、2018年より開催しています。本展では、こどもから大人まで、誰でも作品鑑賞をじっくりと楽しんでいただける仕掛けとして、会場内にワークシート(おしゃべりシート)や模写シートをご用意しています。また会期中には対話型鑑賞プログラムを開催。参加者全員でじっくり作品をみながらおしゃべり(対話型鑑賞)します。ひとりで静かに楽しみたい、という方ももちろんいらっしゃると思いますが、本展では、ご家族やお友達同士、更にはその場に居合わせた方同士でも、作品について対話しながら作品鑑賞をしてみてはいかがでしょうか。



会期 | 2019年8月3日(土)-9月1日(日) 11:00-18:00 会場 | enoco1階ルーム4 入場無料／月曜休館

主催 | 大阪府立江之子島文化芸術創造センター／enoco

おしゃべり鑑賞会 | enocoスタッフやボッセ(enocoサポーター)と一緒に、作品を1点1点じっくりみながらおしゃべりをします。

定員:各回10名／参加無料／要事前申込(先着順)／各回14時から(1時間程度を予定)

日程:対話型鑑賞／対象:どなたでも 8月10日(土)、24日(土)

対話型鑑賞+模写／対象:小学生 8月15日(木)、22日(木)

申込方法:展覧会ホームページにて詳細をご確認ください。[www.enokojima-art.jp/talk\\_museum2019/](http://www.enokojima-art.jp/talk_museum2019/)

## 作品と展覧会の関係を考える展覧会 「問合いの良さ—コレクション考察—」展

(2019年1月11日～1月27日)

週替りで展示される個展や団体展を観て回ることを楽しみにしている人や、展評を書くためにギャラリーや美術館を訪ねる批評家やプロガードの習いで、一巡りして印象深かった作品をちょっと見直して、会場をあとにする。この展覧会は、そういう鑑賞術では、なにも観なかったに等しくなるだろう。

なんの予備知識もなく、この展覧会を訪れたとしよう。壁には、作者名もタイトルを示す札もない。作品は、大きさもさまざま。それらが、まったく整然とは言えない並べかたで、壁の上の方に掛けているかと思えば、腰をかがめて見なければならないような低い場所に置かれていたり、平面もあれば立体もある。その作風は、どう見ても、一人の作家の仕事とは言えそうにない。

じつは、ここに集められた作品は、大阪府が折あるごとに収集してきた「現代美術」作品である。その数は、合わせると7900点に及ぶという。今回は、その中から選び出された「大阪府20世紀美術コレクション」展の一部となるものなのだ。

通常こうした所蔵品を展示するときは、ある枠組みを借りて、テーマを冠し、整然と並べて見せるものだが、この「問合いの良さ」展は、趣きが異なる。

7900点の中から、Yukawa-Nakayasuと一人の学芸員が、議論を交わしながら選び出した作品を、その議論を通してYukawa-Nakayasuが最終的には自分のまなざしと思考で、自分の作品をそこに添え、所蔵品と対話するように展示したのである。

作品は壁に掛け、床に置き、側に作者名とタイトルを添えておくのが、展覧会の常識だとしたら、この「問合いの良さ」展は、その常識にそっと疑問を差し出している。その差し出し加減も「問合い」であることに気づくには、よほどじっくりこの展覧会を観て回らないといけない。

会場の作品はいくつかの群れを作っているように見えるが、それらが一種連鎖反応を起こしながら集まりつながっている。そのつながりは、ときには主題であったり、手法や材質であったり、制作するという態度であったり、作品を觀ようとしている方の、目や心のありかたも、展示の働きの中へ引き入れようとしている。

芸術作品というものは、一人の個性ある作者が、その考え方を表現技法を尽くして詰め込んだものだ、というわれわれの常識的芸術観が、ここでは柔らかくしかし根底的に問い直され、21世紀の現代美術の制作と展示はどのようにあるべきか、を考えようとしている。

「展覧会について考える展覧会」とでも名付けよう。一つ一つの作品が全体の展示になにか声をかけている展覧会。「展覧会」そのものが「作品」になろうとしている展覧会。「問合い」とは、そのさい、「作品が生まれる問合い」でもあり、会場を巡りながら「展覧会とはなにか」を「考えることを招く問合い」でもあるのだ。その意味で、この展覧会は、現代における展覧会の可能性を提示する展覧会ともいえよう。



「問合いの良さ—コレクション考察—」会場写真  
撮影:齊生田兵吾

木下長宏 きのした・ながひろ  
美術批評・美術史批評。横浜国立大学を退職後、2004年より私塾く土曜の午後のABCを運営。芸術思想史の勉強会を続けている。主著に『自画像の思想史』五柳書院、『美を生きるために』みすず書房、『ミケランジェロ』J・ゴッホー『自画像紀行』ともに中公新書、他。



## 「これまで」のイベント情報 past events

### 続・enocoの学校発表会

2019年3月16日(土)

〈続・enocoの学校〉受講生は成果発表「江之子島実験室」で、半年間の受講で学び、気づいたことを、ひとつのコミュニケーションメソッドとしてまとめ上げ発表しました。

このメソッドは、本と言葉を贈りあうことでライブラリーをコミュニティ化するもので「ときめき♡出会い系ライブラリー計画」と名付けられました。参加者が初めて出会う人とペアになり対話していく中で、相手のために贈りたいと思う本を互いに選び贈ります。それはまるでサプライズプレゼントを受け取ったように感じ、二人の距離がぐんと縮まり、そこに「ときめき」が生まれるというものです。

今期の課題として「表層的なコミュニケーションから、一步踏み込んだコミュニケーション」があり、メソッドができるまでの「合意形成」にたくさんの時間を費やしましたが、プロ

セスとワークに来場者も巻き込みながら実施できることは、今期生らしい取組みだったと感じました。

古谷 晃一郎／enoco企画部門



**enocoの学校とは：**  
enocoの学校は既成概念にとらわれない自由で柔軟、かつ創造性豊かな発想や思考を学ぶ人材育成プログラムです。enocoが大事にする「創造的であれ」の精神を基に様々な学びと対話を深めることのできる学び場です。そのプログラムのひとつ〈続・enocoの学校〉は様々な分野で社会課題に取り組む実践者が、今まで使っている思考法やツールを開示しシェアしつつ磨き上げる、実践的な学びの場として約半年間の講座を開講しています。

### 創造のテーブル2019

2019年2月23日(土)

ただ単にゲストの話を一方的に聞く講演会、あるいは尻切れトンボで終わってしまうシンポジウムではなく、ある成果をイメージし、そこに近づくことを目標とした新しいトークセッション「創造のテーブル」は、enocoの3つの柱である教育・プラットフォーム・ネットワークについて最新の情報を交えながら議論しました。

最初のテーブルのゲストはナガオカケンメイ氏。ご自身ではあまり意識していないそうですが、彼がずっと提唱しているロングライフデザイン、D&DEPARTMENTそのものが教育だとれます。そして、「作らない」から「新しく創り出す」ことへ大きく舵を切っていくというホットな情報もいただきました。広場ニストの山下裕子氏からは、都市における広場の必要性と、いかに市民が自ら企画運営していくか、その重要性を富山市のグランプラザを例に話されました。福祉、医療と、ますます積極的に活動領域を広げている山崎亮氏からは、主体的に考え、行動する人たちで構成されたコミュニティを作ることこそ、図書館や公園を造ること以上に、地域を元気にするのではないかというメッセージとともに、公民館活動の新しいカタチを

デザインするなど、地域と教育をつなげる活動が増えていくのではないかと話されました。

毎回、面白い展開になる創造のテーブル。次回は2020年1月11日に開催予定。テーマは「都市とアート(仮)」です、乞うご期待!

甲賀 雅章／enoco館長



### Osaka Creative Forum 2018 クリエイティブ・プレイスメイキング-文化芸術を活かしたまちづくり-

2019年3月29日(金)

enocoと大阪府が協働して実施する「プラットフォーム形成支援事業」の成果を共有し、国内外の先進事例を紹介するフォーラムを実施しました。最終回となる今回は、3名のパネラーが事例紹介とクロストークを繰り広げました。

今回のテーマであるプレイスメイキングとは、コミュニティの再生や賑わいの創出などによって、個々人にとって居心地がよく、愛着が持てる空間づくり、生活の質を高める場所づくりを行う考え方や手法のことです。

コーディネーターを大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課主任研究員の寺浦薰氏が務め、劇作家・演出家・青年団主宰の平田オリザ氏、美術家の北澤潤氏、当事業のチーフディレクターである忽那が登壇しました。

数々の演劇作品で国際的に高い評価を受ける劇作家の平田氏には、基調講演「芸術・文化で養う“自己決定力”が地方を救う」を行っていただきました。平田氏が提唱する“身体的文化資本”的醸成方法や、“文化的格差の拡大への危惧”など、豊岡市の例を交えながら、“重要なことは、文化の自己決定能力であり、自分たちのことを自分たちで決めるセンスをもてるかにかかる。文化の自己決定能力は、身体的文化資本からくる”と、幅広い層の参加者に対して分かりやすくレクチャーいただきました。

日本とインドネシアを拠点に、先鋭的なプロジェクトを実践されている北澤氏は、日常によって規定されることへの違和感を抱き、個人の意見や振る舞いは、個人によってつくられたのではなく、日常によってつくられている部分が多いのではないかという観点を持たれたお話を、これまで展開された様々なプロジェクトを、活動紹介を通してお話しいただきました。

また、市町村の課題に取り組むとともに、水都大阪のまちづくりを推進してきた忽那からは、“公共空間、あるいは公共的な民地を含め、いわゆるパブリックな場所を、多様な人が多様な使い方をしていくことが、日本のまちを変えていくために重要なことである”“多様な人々がパブリックで活動をつづけていくためには、行政だけでなく、民間もエリアマネジメントのような方法を執っていく必要がある”と来場者へ問いかけました。

パネリストはそれぞれの分野での実践状況や困難にぶつかった時の対処法など、より実戦的なお話を伺え、ディスカッションでは、会場からも活発な意見が出され、濃密なフォーラムとなりました。

石塚 育代／enocoプラットフォーム部門





## enocoのひとびと people



この夏は和歌山県立近代美術館(なつやすみの美術館9:水と美術)と芦屋市立美術博物館(こどもとおとな-これなににみえる?)に行く予定をしています!子連れなのでゆったりじっくりとはいきませんが、息子(5歳)との美術鑑賞、子も親も楽しめる方法を模索中です。(企画部門 高橋真理子)



先日、JR先の城崎でふらりと立ち寄ったステキな竹細工のお店。愛用の台湾の茶器と茶道用具と置きの美しい籠を買い求め。喜び勇んで飛んで帰り早速入れてみる。がしかし。その大半は籠に収まってくれず。今では本来の用途としてのお菓子が積座します。それもまたいをかし。むむむむ。(企画部門 河崎由香子)



ご存知でしょうか?enocoは有人離島専門フリーペーパー『季刊ritokeli』の公式設置ポイントになっています。島(宇和島/愛媛)で生まれ、島に住み(某島/大阪市)、島(江之子島)で仕事をする僕としては、ritokeliに並々ならぬ思い入れがあります。特に連載の島人コラムは毎回楽しみにしています。(企画部門 古谷晃一郎)

### オン☆ザ☆レビュー

enoco地下1階の古書店、ON THE BOOKS  
米田店長によるブックレビュー。アートブック・写真集・デザイン・建築・ファッションからマンガ・音楽・映画・カルトまで、多彩なラインナップの中から、今の気分をあらわす1冊をご紹介いただきます。



#### 裸祭り

著者:矢頭保(やとうたもつ) 1969年 株式会社美術出版社

1960年代~70年代にかけて、たった3冊の写真集を残して伝説となった写真家の矢頭保。日本における男性ヌードの第一人者と呼ばれますが、当時は鳴かず飛ばずだったそうです。商業的にはゲイに向いた作品が中心なのですが、構図や陰影の使い方がとても巧みで芸術性が高く、エロとアートのどっちつかずが理由でしょうか。当時の閉鎖的な環境を考えれば(そりゃ需要ないだろうな~)と勝手に想像してみたり。本書「裸祭り」では血氣盛んな野郎たちの勇姿が写されており、巻末には三島由紀夫らによる寄稿文のほか、日本各地で行われている裸祭りのリストも収録しています。日本古来の風俗を、ちょっぴりセクシーな目線で楽しんでみてはいかが?

#### ON THE BOOKS

営業時間:11:00~20:00(月曜日定休)  
掲載の書籍は店頭・オンラインストアで販売中 [www.on-the-books.info](http://www.on-the-books.info)

#### 米田 雅明

ON THE BOOKS 店長



### 大阪府20世紀美術コレクション

1974年から2007年にかけて大阪府が収集した「大阪府20世紀美術コレクション」。総数およそ7900点の中から、enocoスタッフのおすすめ作品をご紹介します。

この  
一  
点  
!



「市松の庭 東福寺(方丈裏)」  
岩宮武二(1920-1989)  
1994年(プリント制作年) / タイプCプリント

「ケン、バ、ケン、バ、ケン、ケン、バ」って、リズムよく遊べそうだなあって、そう思うんです。

この市松模様の空間は、石と苔で構成された東福寺本坊の枯山水のひとつ。東西南北に4つある枯山水の北側のお庭です。作庭家・重森三玲氏が昭和14年に手がけた作品で、当時としては、かなりモダンな日本庭園であり、現在も多くの方が見学に来られているそうです。

市松模様って、いわゆるチェック柄。

チェック柄は、ハンカチにしても、スカートにても、ネクタイにしても、生地全体をおなじチェックのパターンで埋めつくしますが、重森氏はそうしませんでした。写真的右上(東北方向)に向かうに連れ、苔の面積を大きくしています。だんだんと苔の緑が多くなり、最後は隣接する森の緑へとつなげていく、そんな仕掛けとなっています。

幾何学模様であり人工的デザインパターンともいえる市松模様と、自然の森との出会いを調和するいい塩梅のところに、楽しいリズムが生まれた作品だと感じます。

本写真の作者である岩宮武二氏も本庭園がお気に入りであり、多くの外国人クリエイターを庭園にお招きされたようです。クリエイターたちの「フォトゼニック!(本人表現)」という賞賛がとても印象に残ったというエピソードのある一枚です。

P.S 枯山水は鑑賞するための空間で、立ち入ることはできません。残念ながらケンバもできません。

#### 濱本 庄太郎

enocoプラットフォーム部門



### 館長の履歴書 Vol.1

### Doの仕事。 Beのシゴト。

今更と言えば、今更であるが、enocoの館長「甲賀雅章」とは一体何者なのか?そんな疑問を持っている人が、少なくないようだ。ということで、2回の連載で彼の正体を明らかにしてみたい。



enocoのある大阪市西区江之子島では、市民やクリエイターの皆さんのが文化的活動などを日々行っています。毎号その様子や最新情報を紹介していきます。

#### えのこじまのまちのお誕生日会「えのこじまグルグル」(2019年6月8日)

昨年に引き続き、江之子島地区まちびらきイベント「えのこじまグルグル」が開催されました。このイベントは、2018年に完了した「江之子島まちづくり事業」によってできたenoco・2棟のマンション・日本生命病院の3拠点に加え、津波高潮ステーションと木津川遊歩空間<トコトコダンダン>を会場とし、まちの「お誕生日会」としてスタートしました。

2年目となった今回は、地域活動のプラットフォーム「えのこクラブ」にて「えのこじまグルグル実行委員会」を結成(えのこクラブには各拠点で活動するメンバーや、江之子島界隈の会社やお店の方々など、様々なメンバーが参加しています)。みなさんお忙しい中、数ヶ月前からミーティングを重ね、準備を進めていました。当日は梅雨直前にもかかわらず、なんとか天気に恵まれたくさんの方にご来場いただき、皆さんのんびりと江之子島のまちを楽しんでいただけたようでした。

このイベントの特徴である「皆で同じ日に、ギュッと凝縮した普段の活動をお披露目する」というスタン

まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだった。そんな彼に転機が訪れたのが、そんな絶頂期の37歳の時である。企業や地場産業の活性化、デザインビジネスから、彼の興味は地域や社会との関わりに移っていく。そして、38歳の時に、今静岡市の五大構想の一つになっている「まちは劇場」をスローガンに掲げ、大道芸ワールドカップin静岡の前身とも言える「しづおか野外文化祭」をスタートさせる。Doの肩書きが又増えた。イベントプロデューサー、芸術監督、ソーシャルデザイナー等々。当時の彼のプロフィールに、こんなことが書いてある。文化や芸術を21世紀型都市経営の最も重要な資源として捉え、....ここに、彼のBeを垣間見ることが出来る。何をし(Do)何を得るか(Have)ではなく、(Be)どうありたいかに重点を置き始めた彼の人生はこの先どう展開されていくのか。お楽しみは次回に。文責:甲賀雅章

スタッフによる「副音声コラム」あり  
[www.enokojima-art.jp/news-letter/appendix](http://www.enokojima-art.jp/news-letter/appendix)



ス。特別な日のために特別な何かを作り上げるのではなく、普段の活動に少しだけ特別感のある仕掛けや、挑戦してみたいこと皆さんをプラスして、皆さんに知ってもらい、ともに行動しともに楽しむ。このようなゆるやかで、日常と地続きにある、ちょっとだけ特別な地域のイベントをこれからも続けていきたいと考えています。ちなみに、えのこクラブは随時、参加メンバーを募集しています。江之子島界隈のみなさん!いつでもご参加お待ちしています。

吉原和音/enoco企画部門

